

平成 25 年度 第 1 回文化芸術に関する意見交換会

- 1 日 時 平成 25 年 6 月 28 日（金）15 時 00 分から 17 時 00 分
- 2 会 場 浦和区役所保健センター 3 階講座室
- 3 出席者
 - (1) 委員（11 名）
石上城行、三須康男、五十嵐健一、井藤仁、大久保佐貴玖、おかべりか、小林正太郎、
柴原早苗、宮本智子、山口聖子、山田登美男
 - (2) 事務局（7 名）

市民・スポーツ文化局	和田局長
スポーツ文化部	川島部長、金子次長
文化振興課	大西課長、織田課長補佐、高橋主査、横溝主任
- 4 公開・非公開の別 公 開
- 5 傍聴人の数 2 人
- 6 内 容
 - (1) 開会
 - (2) 市民・スポーツ文化局長挨拶
 - (3) 委員、事務局等紹介
 - (4) 意見交換
 - ①文化芸術都市の創造に向けた施策について
 - ②シンボル事業について
 - (5) その他
 - (6) 閉 会

会 議 記 録

○開会宣言、市民・スポーツ文化局長挨拶後、意見交換 ①文化芸術都市の創造に向けた施策について、事務局より資料1に基づき説明。

事務局 <資料説明>「資料1 文化芸術都市の創造に向けた取組」

石上委員長 説明が終わりました。ただいまの件についてご意見がある方は、挙手を願います。2つのテーマがありますが、あわせて50分程度、意見交換ができればと考えております。どなたからでも結構ですので、お願いいたします。

おかべ委員 最近、小さな催しに行きまして楽しかったことをお話しします。

北浦和駅の東口にレッズスクエアという公共施設があって、中山道の昔の様子を描いたパネルが展示してありました。ここは貸しスペースになっていて、時々、このような小さな企画展が開かれています。

「たかのけ骨董コレクション」という企画展で、アンティークの専門ではない素人の方が集めた引き札や商店街がつくった戦前の双六が展示されていまして、その作品のコメントが、学者ではない素人で好きな方が、素人に向けて書いた非常に親しみやすい、言ってみれば、学術的なことから逸脱したようなコメントがついたパネルが展示してあり、それが逆に新鮮で、素敵だなと思いました。

また、商店街がつくった双六があるのですが、ふりだしから上がりまでたくさんのコマがあって、そのコマの一つ一つがスポンサーになっています。つまり、昔のお店があって、そこの屋号が今の屋号と同じであったりして、この店は今もあるとか、この店はなくなったというような楽しみ方ができます。その双六の複製を1枚100円で売っていました。下手な双六より、よほどおもしろく、私は、この「たかのけ骨董コレクション」のおかげで、昔の浦和のまちにタイムスリップしたような気持ちになりました。また、引き札など名もない人が手がけたグラフィックデザインも素晴らしいですし、電車がなかった時代に、街道で物が行き来していたころの商人の姿や活動の様子が、解説を読むと手に取るようにわかって楽しかったです。

そのレッズスクエアで、今年の初めに開催されたのは、折り紙が好きなアメリカ人の作品展でした。アメリカ人で、日本に来て英語を教えている若い男性でしたが、折り紙が好きで、自分でいろいろ工夫してつくった動物関係の折り紙がたくさん並んでいました。また、一緒に彼の友人の日本人がつくったコースターや西洋風の雑貨に自分のイラストをつけた作品も展示されていました。ここで感じたことは、手作り感、地元感があって、出品している人と来場した人の距離が非常に近いということです。このイベントは小さな試みですが、このようなイベントが重なってくると、おもしろい大きな流れになるのではないかと感じてお話しさせていただきました。

石上委員長 ありがとうございます。そこは、いわゆるギャラリー的な場所ですね。

おかべ委員 そうです。この部屋の3分の1くらいのスペースしかないところでしたけれども、

そこでも、ボランティアの方々が生き生きと活動していらっしゃいました。

三須副委員長 まちの中で自然と、特に多くの人が行き来する商店街や目にするようなところで文化芸術を見ることができる。それが自然な形でできているということですね。

おかべ委員 そうです。それともう一つ、この間、横浜のことを大久保委員がお話ししてくださいましたが、大きな試み「パワフル」な部分と、今お話ししたような地道な取組の両方があると良いと思いました。

三須副委員長 今回、テーマ1で「創造性によって活力あふれるまち」という課題が出ています。これは今回の条例の核と言いますか、文化芸術をきっかけに地域の活性化や経済を回していこうということだと思います。文化芸術を活かしたコミュニティビジネスなど、行政が文化芸術とビジネスを結びつけるつなぎ役の役割ができると一番良いと思っています。

発表するという視点で考えると、コミュニティ施設や公民館などを借りて開催する場合、今のような地元根づいた、経済が回っているところと文化の接点が、切り離されている面があると思います。逆に、貸し館で貸している立場の方、あるいは、借りている方が、もう少し行政に対していろいろな面で幅広く相談をして、文化担当部局だけではなくて、今の話で言えば、商業担当部局や経済担当部局などと連携することで、お金が回るような方向にできると良いと思いました。

石上委員長 そうですね。今のお話を伺っていると、「創造性」という言葉の捉え方が広いですよ。従来の大きな施設で何かをすることだけではなくて、自然に生活の中でもいろいろな「創造性」があるということですね。

三須副委員長 そのような場をうまく提供してあげられると良いですね。

大久保委員 特に強化したい部分として挙げられている4つのまちの姿のうち、「文化芸術を世界へ発信するまち」というのがありますね。これについて少し考えてみました。

発信となると、今やネットとメディアだと思います。CMのようなお金をかける方法ではなくて、お金をかけずに行う方法を考えてみました。その一つとしてロケ誘致があります。現在、いろいろな地域でロケ誘致には取り組んでいます。政令指定都市の福岡市は、福岡フィルムコミッションというサイトを立ち上げていまして、日本語以外にも英語、中国語、韓国語の3か国に対応したサイトになっており、お勧めのロケ地が、周辺地域を含めて約400か所紹介されています。400か所ということですから、いわゆる観光スポットだけではなく、商店街の何気ない風景、小さな病院の中など、ロケに使えるようなところが写真で紹介されていて、病院や神社仏閣などのキーワードで400件の中から検索できるサイトになっています。

さいたま市でもロケ誘致の取組そのものももっと積極的になったら、それがいろいろな経済効果をもたらしてくれるのではないかと思います。

先ほど申しましたように、このロケ誘致というのは、お金をかけないでサイトを

立ち上げて、行政は交通規制などの面でバックアップするわけです。特徴として言えることは、映画やドラマ、グルメ紀行といったものを通してさいたま市の文化芸術をアピールできるということです。しかも、さいたま市でロケができるとなれば、東京から近いということで非常に有利だと思います。さいたま市にも、探してみるとロケに最適な場所が多くあると思います。例えば、さいたま新都心でレンジャーものをやってもおもしろいと思いますし、見沼の田圃やホテルなど、いろいろな風景が撮れる環境はあると思います。プロデューサーの方が見ておもしろいだけではなくて、一般の人が見ても、切り口がロケ地という一つのエッジが立っていて、非常に魅力的であると思いますし、また、映画やドラマを見た人が、ロケ地に興味を持てば、さいたま市のイメージアップや知名度アップにつながるということもあると思います。経済効果としても、ロケが誘致できれば、ロケのための交通費や滞在費、機材の調達費などが直接的なものとして見込めるだけではなくて、観光スポットとして、2 次的な効果も見込めると思います。このようなことから、ぜひロケ誘致を積極的に検討していただけたらと思います。

石上委員長 ウェブを使つての宣伝とロケ誘致の経済波及効果ということですかね。今、聖地巡礼というもので、かなりヒットしたドラマだと大量のファンがその撮影現場に行くという話を聞いたことがありますので、結構、可能性はあるような気がします。ほかにはいかがでしょうか。

井藤委員 私は、岩槻で人形に携わっております。人形は、「世界の盆栽」とまでにはなかなかいかないですが、少しずつ人形を世界に発信していこうということで、岩槻の人形の同業者で、NPO 法人として「地域伝統文化推進機構」を立ち上げています。外国の大使館の方々に岩槻を呼んで、若手人形作家などの作品、技術、製作工程などを、直に見に来ていただくということで、去年、案内を出したところ、15～16 の大使館の方からぜひ行ってみたいという回答もいただいています。それを今年にかけて実現し、人形を世界に向けて発信しようという取組をはじめたところです。

石上委員長 ありがとうございます。外国の方が興味を持つ視点は、日本人の我々とは少し違うのでしょうか。そこにうまくアクセスできると非常に効果があると思います。

井藤委員 そうですね。我々が今扱っている国内向けの人形そのものを持っていても、なかなか通用しないと思います。どのようなものかということに関しては、手探りの部分もありますが、「人形のまち岩槻」に足を運んで見てもらうということが一つの狙いです。

石上委員長 盆栽文化を世界に発信するということで、盆栽町などは、いろいろ活動されているように伺っていますが、実際のところはいかがでしょう。

山田委員 去年の 11 月にスペインで盆栽大会がありまして、参加しました。そのときに岩槻の人形も持っていきました。

考えてみると、何か人形と盆栽の一体感が足りないような気がしています。さい

たま市というのは、横浜市とどこが違うかという、内陸部で、空気、水が良い、このような独特の環境の中で4市が合併して存在しているということだと思いません。

大宮の盆栽町は、今年、村をつくって90年のお祝いをさせていただきました。歴史が古いので外国人もいらっしゃいますけれども、盆栽というのは、検疫の問題もあって、簡単にお土産として持っていけない事情もあります。それに代わる独特で外国人に喜ばれるようなお土産を考えるというようなことも必要だと思います。

さいたま市らしい文化を創造していくには、子どもや家族も喜ぶもので、市内の一体感を高めるもの、例えば4市の良いところを合わせたシンボリックなモニュメントのようなものを駅前とか、集合場所につくっていくとか、今後、10年後、50年後、100年後を見据えた展開が必要ではないかと思えます。

今、盆栽は、世界50か国くらいからお客様がいらっしゃる国際的な文化になっています。ただ、取り組むべきことが多くて、まだその途上であり、我々も日々試行錯誤している段階です。やはり、世界大会や国際大会など、海外の文化人を呼んでお知恵をちょうだいしながら、我々自身も海外へ出て、外国の良いところは取り入れて、独特な文化性を高めていくという取組が必要だと考えています。そして、それをいかに発信していくかということになってくるかと思えます。

石上委員長 盆栽の世界大会というものがあるんですね。

山田委員 はい、4年に1度。第1回は大宮でやりました。今年9月に決定する予定ですが、その誘致活動を行っている最中です。

それに限らず、小さな催しもまめに行っていくことが必要ですね。

石上委員長 そうですね。ほかにはいかがでしょうか。

柴原委員 日本経済新聞の埼玉版に、中国でさいたまシティマラソンのPRをしていますという小さな記事がありました。さいたまシティマラソンなどは、資料の例1にあるような「他のイベントに参加してさいたま市の文化をPRする」ということに活用できるのではないかと思います。新聞で取り上げられると、それだけでも波及効果が大きいと思います。

あとは、今はネットの時代なので、フェイスブックやツイッターなども影響が大きいと思います。最近、私が個人的に注目しているのは、ゆるキャラの「くまモン」ですとか、埼玉県内では深谷の「ふっかちゃん」の存在感が随分と伸びているので、何かそのようなインパクトがあるもの、あるいは、市長さん自身が音頭をとって前に出てPRする、何かシンボリックな人、ものがあると良いのではないかと思います。

また、PRする方法として、日本語でPRする以外に、さいたま市でしたら、埼玉大学に留学生の方がたくさんいらっしゃいますし、あるいは、国際交流協会で登録している人、北浦和には国際交流基金のセンターがありますので、そのような組織とも協力しながら、いろいろな言語での発信ができると良いと思います。

石上委員長　そうですね。ありがとうございます。

留学生は埼玉大学で、半年間、日本語研修を受けています。それが次にどうつながっているかよくわかりませんが、関東圏の留学生はここを通過していくわけです。4月から9月頃まで日本語を勉強する一つのコースがあるようで、国費で留学しているような学生たちは、このルートを通っていくわけです。特にアジアの方などは、本国に帰られたら、確実に出世されるような方ですね。

山田委員　インドネシアの留学生で、盆栽の勉強をするために1か月くらい通っていた熱心な方がいました。政府系のかなり優秀な人も来ていますね。

石上委員長　観光地という視点で外国からさいたまにお客様をお招きするというのは、現実的にはどのような状況なのか、小林委員いかがですか。

小林委員　まず、日本には東京という大都市はありますが、世界的に見ると外国人観光客数は30位です。アジアでも8位ということで、実はまだまだ外国人が来ていない国と言えると思います。しかしながら、海外の方が日本のどこに興味を持っているかと言いますと、東京、北海道、京都などの我々が思いつくメジャーな観光都市で、正直言いますと、さいたま市への興味や知名度は決して高くはない状況にあります。ただ、東京という大都市があり、少し足を伸ばせば、さいたま市があるという立地ですので、そこに来る方にアプローチすれば、ポテンシャルとしては大きいと思います。

また、「文化芸術を世界に発信するまち」、これはPRの部分になると思いますが、最近、地域の活性化に関する様々な取組が行われています。そのような取組の中で、その地域が発信したい情報と、受け手が欲しい情報のギャップが大きいという問題が言われています。今後、PRしていくということであれば、何が周りの人間が欲しい情報なのかという受け手のニーズをしっかりとセグメントしていかないとなかなか厳しいと思います。世間が必要としていない情報をいくらPRしても、なかなか効果はあがりませんし、さらに、競争相手がたくさんいる中で、似たような情報を発信しても埋もれてしまいますので、発信する情報には、さいたま市の独自性も必要になってくると思います。極めて綿密な戦略を練った上でターゲットを決めて、何をPRしていくかということをしっかり定めないと効果が出ない可能性があります。

石上委員長　やはりリサーチということですね。どのようなものが求められているかということですね。ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。

宮本委員　前に、さいたま市は合唱が盛んということを申し上げましたが、何か人形や盆栽等とコラボできれば良いと思います。コンサート会場に人形や盆栽等を飾り、会場のお客様にアピールするとか、さいたま独自のものを考える必要があると思います。

また、イベントの開催に当たって、一般市民からアイデアを募集するのもおもしろいと思います。私は、二期会に所属していますが、毎年、「二期会WEEKコンサート」がありまして、あるテーマを決めて、そのテーマに沿った企画を募集・選

出し、

二期会WEEKでコンサートを開くという形です。例えば、クラシックでも、ただ立って歌うのではなく、トークもあり、しっかりしたオペラを歌い、そこに映画音楽も入れるなど、本当に盛りだくさんの企画で実施したコンサートを最近見てまいりました。このような取組もおもしろいと思います。

それから、世界に発信するということでは、「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン熱狂の日」という音楽祭がありまして、これは一流の演奏を低料金で提供し、明日のクラシック音楽を支える新しい聴衆を開拓するというコンセプトのもとに、クラシック初心者から上級者まで楽しめるように構成されています。また、年齢による入場制限をせず、幼児や子どもが入場できる公演もあり、家族でクラシック音楽を鑑賞できます。これは大変素晴らしい企画ですが、このようなイベントを開催するためには、多くの企業の協賛も募らなければ実現できないと思います。

今は「YouTube」という便利なツールもありますので、企画したものを「YouTube」で発信していくという方法もあると思います。

石上委員長 ありがとうございます。では、時間が迫っておりますので、テーマ2に移らせていただきたいと思います。テーマ2は、「人材等の育成や文化事業に対する支援策」です。人材をどのように育てていくか、想定される人材として3パターンほど示されていますが、ご意見がある方、お願いいたします。

山田委員 文化事業の補助金の件ですが、市内に事務所を置き、主として市内在住の者を対象とするなど一定の条件を満たす文化団体とありますね。これはやはり、市内に事務所があって、市内に限らず日本国中、世界を相手にしているような団体を支援していきたいということと考えてよろしいですか。

石上委員長 補助金についてですが、年間何件くらい助成しているのでしょうか。

事務局 年間約80件の実績がありまして、市内に事業所を置いて、主に市内在住者によって構成されている団体に対して支援する制度になります。この会議では、この枠組み以外の部分でも、何か新しい視点でご意見をいただければと思います。

事務局 若干補足させていただきますと、これは団体が行う事業に対して補助する制度で、イベントなどの催しにかかる費用の一部を助成するものです。18万円を限度としていますが、予算の総額が決まっていますので、申し込みが多くなると満額は助成できないということになります。

石上委員長 言葉はあまり良くないかもしれませんが、広く浅くと言いますか、まんべんなく支援する制度ということですね。

山田委員 盆栽ということで申し上げますと、海外の若手から盆栽を勉強したいという申し込みがよく来ます。こうしたケースの場合、日本語は少しできるかもしれませんが、衣食住など、いろいろな問題が絡んできます。例えば、観光ビザの場合は3か月で

すが、3か月で教えられる範囲は限られています。このような人達は、日本の文化を自国に帰って広めていただくというような役割も担っているわけですから、相当な費用はかかりますが、何らかの支援は必要だと思います。やはり文化というのはお金がかかるものだという考え方も必要だと思います。

もう一つは、技術、ノウハウです。例えば、映像などで考えると著作権の問題などがあると思いますが、私たちが30年、50年と蓄積した技術を教えるということは、事業主にとってはかなり費用がかかる問題でもありますし、それを守らなければいけないという問題でもあるわけです。ですから、こうした商標権のような法的な部分を変えていくなどの観点からも、研究していく必要があるでしょう。

国内的に見ますと、成功したのは長野県の小布施町です。小布施町は、住民の文化芸術に関する意識を高め、住民と協働でまちづくりを進めています。そのような中で、さまざまな施設が誘致され存在し、おいしい飲食店やお菓子屋などがあります。

あの町には、一つの大きなまとまりがあり、この一体的な取組が大きな知名度につながっていると思います。

柴原委員 この文化事業補助金というのは、さいたま市が交付しているものだと思いますが、交付された団体は、事業が補助金を得ているということについて、何かチラシなどに記載しているのですか。

事務局 特に、補助金事業であることを記載するという規定にはなっておりません。

柴原委員 私は、市民としてこのような補助金があることを初めて知りました。例えば、今申し上げたようなことをきちんと記載するよう規定して、市とこの団体はお互いに協力しているということを見せていった方が良いと思います。

もう一つ。先ほど、財源に限りがあるというお話がありましたので、もし、将来的にシンボル事業を行うのであれば、補助金は、シンボル事業の認定事業に対して助成するという方法もあると思います。市と各団体が、同じ方向を向いて有効に財源を使っていくほうが良いのではないかと思います。

石上委員長 お金の使われ方が見えるようにして、目的がはっきりしたほうが良いということですね。

三須委員 確かにそうですね。財源的に限られ、税収がなかなか上がらない中で助成しているわけですから、象徴的なものに集中していくことも一つの選択だと思います。しかし、それ以上に「市民等が文化芸術活動に主体的に参画するまち」の実現に向けて、それぞれやりたいことが違う人たちに対する支援をしていく中で、限られた税金を有効に使うには、それぞれが主体的に提案したのに対して助成するというのは効果的かもしれません。

そうしたときに考えなければならないのは、補助金をもらえて良かった、予算的に少し助かったということで終わりになるのではなくて、広がりを持たせるとか、次世代につないでいける、まさに人形も盆栽にも言えるかもしれませんが、そのよ

うな担保が取れる、道筋がつけられる支援の方法だと思います。例えば、物を買っていくら出す、何かイベントがあるからいくら出すという要件もあると思いますが、どのようなところに工夫があるのか、終わった後にどのような成果が報告できるのかというようなことも助成の要件として考えても良いのではないのでしょうか。

宮本委員 質問ですが、チャリティのようなものに補助金は出ないのでしょうか。

事務局 チャリティ事業には補助金を出すことはできません。

宮本委員 そうでしたか。東日本大震災の復興事業の企画を考えているのですが、残念です。

石上委員長 波及効果というものをどのように見ていくかということは非常に大事ですね。そうでないと、ある種、仲間同士で何かやっただけで、やりっぱなしで終わってしまうと、補助金としてはあまりよろしくないかと思います。

事務局 今、三須委員から補助金の話がございました。毎年行われる事業で、申請があれば、その事業に対して 18 万円を限度に補助金を交付しているわけです。確かに、18 万円では足りないというご意見をいただくこともありますが、先ほど、ご説明したように、限られた予算の範囲で実施しているという現状がございます。

しかしながら、次の議題のシンボル事業ということで考えますと、さいたま市にはいろいろな事業があるけれども、中核となるような大きなものがない。例えば、トリエンナーレという形で 3 年に 1 回、大きなイベントを開催するときには、音楽、美術、それ以外にも盆栽や人形、鉄道などのさまざまな既存の文化も活用し、非常に多額の予算が必要になってくると思います。このシンボル事業に関しましては、多くの市民が参画して開催するものですので、ここで必要となる予算についてはこのときに担保していくということになると思います。

石上委員長 ありがとうございます。どちらかというところ、補助金は人材の育成と言いますか、ベースの部分を支えている支援ということですね。そのために、支援の方法として今のスタイルが良いのか悪いのか、もっと良い方法はないのかという点について、ここでご意見いただければと思います。また、シンボル事業については、若干、違う視点で議論が必要ということですね。

井藤委員 補助金事業の問題点を考えてみますと、補助金は毎年継続されるものではないので、補助金が出なくなったらその事業は終わりということがよくあります。ですから、補助金を出発点として有効に生かすということで事業を構築しないと、補助金を頼りにして、補助金が切れたら事業ができなくなるというの多いような気がしてなりません。

一方で、人材の育成という視点で言いますと、文化芸術を理解する人材を育てるという言い方は生意気ですが、そのようなことがないと、いくら良いことを行っても全く理解されず、何の意味もなくなってしまうのではないかと思えてなりません。今、岩槻でも、岩槻人形会館が 2 年ばかり延期になっています。我々、岩槻の地元

においても、このような文化や芸術に対する理解が、もう少しあれば、もっと違った展開になったのではないかと考えています。そういう意味では、幼稚園・小学生・中学生くらいから、文化芸術に接する機会をつくっていく必要があると思います。

我々は、各学校に、毎年5校くらい、職人が5人、10人と出張して、人形づくりを教えたり、人形に関する勉強会を開いたりしています。それは人形という部分だけですが、広い意味で、文化についてこのようなことができればと思っています。

石上委員長 ありがとうございます。質の高い受け手を早くから育てていかないといけないということですね。この資料の中では抜けている部分かもしれません。具体的には、小学校に出向いているというお話ですね。

人形だけではなくていろいろなジャンルで、もっとそのような機会が増えるといいですね。それぞれ活動されているのでしょけれども、どこかで途切れてしまっているのでしょうか。

山口委員 私が所属しております「さいたま市音楽家協会」は、補助金をいただき、運営してきておりますが、非常にうまくいっております。私たちの団体は、クラシックという分野ですけれども、分野によってさまざまな補助のあり方があると思っています。

それから、先ほどテーマ1の時にお話しできなかったのですが、「文化芸術を世界へ発信するまち」ということで、まちがシンボルになっているようですが、私自身は、主人のヨーロッパ駐在などがありまして、たびたびヨーロッパへ行っております。向こうでの経験を少しお話させていただきますと、ヨーロッパに行ってピアノが弾けるといって話をすると、実際に弾くと大変喜ばれます。あるいは、イタリアならイタリア語で歌が歌える、ドイツならドイツ語で歌えるといったときに、やはり文化の共鳴を感じるということも一つの姿であると思います。さいたま市が持っている盆栽や人形という資源は非常に貴重ですが、盆栽や人形があり、音楽もあるというような考え方も必要ではないかと思っています。

それから、今、熟年世代にはオペラツアーが大変盛況です。ワーグナーとヴェルディの生誕200年ということで、とても高い海外ツアーもありますし、日本でも、東京のオペラシティなどで盛んにオペラが開催されています。また、銀座ではニューヨークのオペラ映画をやっています。そこにいらしている方々は、比較的年齢の高い方が多いと思います。

前回の委員会で、子どもの力、子どもの夢を託していこうというようなお話や盆栽が教材に使われている小学校があるというお話をいただいたりして、私はそこで少し考えたのですが、やはり次代を担う子どもたちが文化を近くに感じて、それを育む時間が必要だと思っています。今できることを考えていくと、郷土さいたまを教科書から学ぶだけではなくて、もう少し心が踊るような、自分たちがこのまちについて発信するとか、自分が生まれたまちは、どのようなまちなのかということに、きちんと心が向けられるような子を増やしていくということが必要だと思っています。

最近、私は、さいたま市が10区であることを知らない子がいるのではないかと心配しています。この間、市役所の中を通りましたら、タケカワユキヒデさんのイ

ベントでしょうか、ポスターがあって、そこに虹が描かれていました。それを見た時、さいたま市は10区なのにどうして7色にしたのかなと思いました。子どもにも、10区が一つだと思ってもらうためには、例えば、先ほどのポスターの虹を十色の虹にするとか、ゆるキャラなら十色の虹だから「さいと君」など、子どもがわかりやすいようなものを、公募をしてみようかと思っております。子どもたちにさいたま市の歌をつくらせようかと提案して全学校で考えたりとか、このような企画を総合的に提案していくとおもしろいと思っております。それを中学生の合唱コンクールで歌ってもらおうとか、高校で演奏していただくとか、何か一つの大きな力になるような、総合的に皆が自分のことだと思えるような働きかけがあると、比較的浸透していくのではないかと思います。

石上委員長　　ごく一般の子どもたちが参画できるような場を提供して、それが受け継がれていくようになるということですね。

大久保委員　　人材育成に関して、個人的な感想かもしれませんが、さいたま市では、団体に属していないと、文化芸術活動の発表の場が少ないように感じています。例えば、「さいたま市音楽家協会」や「さいたま市美術家協会」などの団体に属していれば、それぞれの協会において、演奏会なり展示会という発表の場があるわけです。もう少し、個人が気軽に参加できるような開かれた発表の場があったら良いと感じています。

石上委員長　　ありがとうございます。補助金の助成先は、ほとんどが任意団体で、歴史がある団体もあれば、若い団体もあるのではないかと思います。先ほど、約80件の事業が採択されているとお話がありましたが、市内における文化団体の実態としてはいかがでしょうか。

事務局　　約80と申し上げたのは、補助金を受けて事業を実施している団体で、それ以外にも団体は多数あり、それぞれが独自に事業を展開しております。自力のある団体ですと、市の補助金をあてにせず自主事業で開催できる場所もありますので、その数となると、私どもでは把握しておりませんが、かなりの数があると思っております。

石上委員長　　かなり多岐にわたっているようですね。

大久保委員　　もう少し開かれたホールのようなものが、あったら良いのではないかと思います。

石上委員長　　そうですね。そのような企画をする、コーディネートできる人材がいれば良いのでしょうか。ありがとうございます。

申しわけありません。以上で(1)のテーマは終了したいと思います。

○意見交換 ②シンボル事業について、事務局より資料2に基づき説明。

事務局　　<資料説明>「資料2シンボル事業のコンセプト」

石上委員長 ただいまの件について、ご意見がある方は挙手をお願いします。

個人的な感想ですが、2ページ目の資料はなかなかよくできていると思いました。コンセプトのところを比較しながら読むと、取組の性格がよく見えるように思います。恐らく、「土と水の芸術祭」と「瀬戸内国際芸術祭」において、ここで語られているコンセプトは、その土地に住んでいる人たちも忘れていたようなものを十分に話し合っ、構築したのだと思います。ほかは、共通認識があるイメージですね。ですから、キーワードをうまく活用して、コンセプトを立てていくこともできるということが非常によく見えるのではないかと思います。

山田委員

関東大震災で、東京に数多く点在していた植木職人や盆栽師が被災しました。さいたま市の大宮は関東ローム層で、盆栽にとって土と水と空気が良いということで、多くの盆栽業者が移り住みました。これは植物に限らず人間にも直接影響する一致したものだと思いますが、それで、現在、90年の歴史を持って盆栽というものを世界に向けて発信してきました。盆栽は、今、叫ばれている緑化運動の先駆けです。緑が美しく生き生きと輝いているということは、我々人間にとってもうれしいことであるという認識のもとに、自慢できるものだろうと思っています。

盆栽は、植物としてだけではなくて、鉢である陶芸的なものを入れると、飾るための和の文化、つまり床の間や座敷における日本の様式美に通じるものです。

もう一つは、日本は世界に冠たる植物の宝庫です。その植物から得るファッション的な模様、これは世界の人々が驚嘆に値するものがあります。エルメスなども、スカーフに日本の盆栽をアレンジして、日本で5万枚くらい、世界的にはもっと販売しています。そのように応用できるアイデアとして大きなものが、さいたま市には存在しているわけです。

また、飾る花台を日本の伝統工芸の中でつくっておられる作家もいます。そう考えると、相当大きな産業の素材が存在しています。公害に強い植物、四季を通じた花など、日本画の雪月花の世界と共通するものが盆栽にはあります。そのような世界観から見ると、大きな技術的要素が生まれてくると思います。日ごろからそのような面を自負して、海外で講演などを行っています。

大体、ヨーロッパから日本に来るツアーのお客様の目的地は、東京ではなく、京都と大宮です。ヨーロッパでは、東京は何も珍しくないのだと思います。関空から京都へ行って、新幹線で大宮まで来るという人が多いです。大宮で盆栽などを見て、泊まるのは東京へ行く。夜は、東京に優るところが少ないからでしょうね。特徴ある文化としての盆栽は、さいたま市が自慢できるものの一つであると感じています。ですから、この大切な文化を次代の子どもたちに継承していくため、川のきれいな水、ホテルが飛ぶような環境を、我々は後世に残していかなければならないと考えています。

石上委員長 盆栽をキーワードにして、日本文化が背景にあり、エコロジー的な視点も内包しているというお話ですね。それは大きな広がりがあるキーワードですね。

大久保委員 唐突ですが、イベントのネーミングを提案してみたいと思います。個人的なもの

ですが、やはりカタカナのほうが親しみやすいということがあります。私は「アートフェスタさいたま」というネーミングを提案したいと思っています。アートを日本語訳すれば芸術ですが、芸術と言いますと一級で少し手が届かないものという印象があります。一方で、アートという言葉になると少し裾野が広がる感じがします。また、フェスタという言葉を使っています。また、フェスタというのは、文化芸術だけではなくて、お祭り性を取り入れた賑わい、経済効果等を想定しています。

もう一つ考えたのが、このネーミングの下に「つなぐ・つながる」というサブタイトルを入れてはどうかと思いました。これは本当に個人的な意見ですが、「つなぐ」と「つながる」という言葉で思いつくのは、文化とか伝統的なものが未来へと引き継がれていくということと、人と人がイベントを通じてつながっていくということ。そして、さいたま市から発信して世界へつながっていくということ。あるいは、これもさいたま市の一つの課題だと思えますが、盆栽、人形、鉄道、漫画、それぞれ良いものがありながら、それぞれがどうしてもぼろぼろになってしまっている。それをつなげていくという意味で「つなぐ・つながる」というサブタイトルを提案したいと思えます。

石上委員長 ありがとうございます。

柴原委員 議論いただきたいテーマというところで申し上げます。

取り込むべき要素として、スポーツがあると思います。以前いただいたイメージ調査でも、さいたま市に対するイメージとして、スポーツは高かったと思いますし、実際に県内外でもスポーツのイメージは高いと思います。ですから、その部分を排除するのではなくて、うまくリンクできるような形のコンセプトのほうが良いと思います。さいたま市は、「ツール・ド・フランス」を誘致して自転車のPRも促進していますので、このような部分も盛り込んでも良いのかなというのが1点目です。

2点目は「望ましい事業展開のアイデア」です。やはり何かほかの、例えばJRのキャンペーンと合わせるとか、複合的な展開が必要ではないかと思えます。

石上委員長 ありがとうございます。別にスポーツを排除しているというわけではないと思います。文化には当然含まれていますから。何かうまく組み合わせができると良いですね。

五十嵐委員 先ほど、「つなぐ」ということがありましたが、鉄道博物館を運営しているのが「公益財団法人東日本鉄道文化財団」という組織なのですが、東京都の青梅市にある「青梅鉄道公園」、東京駅にある「東京ステーションギャラリー美術館」なども運営しています。ほかにも、鉄道を通じた文化活動をしています。その一つとして、駅でのコンサートがあります。これは、私どもの財団が主体となって、「JR東日本」が後援しているものですが、今年も、6月に上野駅と仙台駅でコンサートを開きます。このように鉄道と音楽が結びつくような活動も行っています。7月にも大宮駅のイベントスペースでミニコンサートを開きます。多くの方が行き来する駅という場所ですし、入場無料ですので、たくさんの方に触れていただく機会にできると思えます。

石上委員長 大宮駅のどこでコンサートを開くのですか。

五十嵐委員 イベントスペースがあります。結構広く場所が取れるところです。

石上委員長 そうですね。大宮駅は広いですね。

浦和駅も広くなるのですか。まだ工事をしていますが、浦和駅も何かいろいろなことができそうな可能性を感じたりしますけれども、「駅」が一つのキーワードかもしれないですね。ほかにはいかがでしょうか。

三須副委員長 さいたまらしさを考えたときに、アンケートにもありますが、都会と田舎が融合しているとか、交通利便性など、あまり文化芸術に関する集約されたイメージが見えてこないですね。資料で見ますと、施設、関連事業、文化財などの文化芸術資源については、これは比べたことがないので、はっきりとはわからないのですが、4市が合併していますから結構多いほうではないかと思えます。これは、逆にさいたまらしさの要素の1つだと思います。

もちろん、核になる何かは必要だと思います。しかし、さいたま市は、合併した都市という歴史があって、それぞれ特徴があるけれども、つながっているという一体感が出ていない。逆に、総合的に行うシンボル事業としては、一つ一つは小さいかもしれませんが、それを一斉に見てもらえるようなきっかけの場としていければ良いと思います。「ツール・ド・フランス」の開催や「世界盆栽大会」の誘致ということもありますので、このような大きな動きと連携していければ効果的だと思います。

PRについても同様です。大きな動きと連携しながら、10区の文化関連事業なども一緒に発信していく。このようなことを意識しながら、シンボル事業を具体的にイメージしていく必要があると思っています。

石上委員長 ばらばらであるところを逆に利点としてアピールしていくという発想ですね。

三須副委員長 そうです。今回、公約の中で、市長が「選ばれる都市」と言っていました。「選ばれる区」と言いますか、さいたま市にはいろいろな区があって、各区の特徴を発信することで、地元の良さがPRできて、相乗効果が出てくると思えます。

石上委員長 そうですね。資料2の3枚目に地図があります。東京からはアクセスが良いのですが、結構、横の移動が大変だと思います。さいたま市の中で、各区でいろいろなイベントを実施するとして、横に移動することを考えた場合、何かアイデアはありますか。

山田委員 文化というものは、イベントの塊みたいなものをつくって、継続していかないと意味がない、継続は力ですから、継続できるための方策、アイデアがないと発展しないと思います。ですから、3年に1回行う国際的な催しには、今お話ししたような塊にして芸術性の高いものを実施していくという考え方でまとめ上げていかな

いと難しい気がしています。

石上委員長 何か大きな見せ方をして、さらに継続性を意識するというのが、大事ということですね。

山田委員 ええ。それが、国内・海外に相当なインパクトを与えていくと思います。

小林委員 イベントについてですが、2つの側面があると思います。一つは、まさにシンボリックな、さいたまを外に発信していくようなイベント。もう一つは、市民のためのイベントです。前者であれば、本物感、一流感というものが重要ではないかと思えます。例えば「瀬戸内国際芸術祭」が大成功しているのも、海外を含めて、そうそうたる方が出品されています。そのような貴重感と言いますか、ここに来れば良いものが一堂に見られるとか、一流感、本物感、これがないとなかなかうまくいかないと思います。

後者で考えますと、例えば市民参加型であれば、合唱団によるイベント等も考えられると思いますが、そこに場を設けて、皆がそこに出たいと思えるような、ある程度のレベルを維持して運営していくことも大事だと思います。

いずれにしても、どちらの方向に進めていくかという基本的な方向性によって大きく議論が分かれてくるのではないかと思います。

委員長からお話があった交通の部分ですが、各地でも行われているように、地方で芸術祭を開いても、二次交通の整備をすれば、公共交通機関の足の悪さはカバーできると思います。

石上委員長 二次交通というのは、具体的にどういうことですか。

小林委員 基本的に、電車やバスなどの公共交通機関を使います。当然、公共交通機関だけでは行くことができない場所があると思いますので、イベント中は、そこにシャトルバスを走らせる形です。このように各会場を結べばカバーできる問題なので、ほかの事例を考えても十分に対処は可能だと思います。ただ、さいたま市の場合は渋滞問題がありますので、この部分は警察も含めた特別な措置が必要になってくるかもしれません。そこは、都会でイベントを行う難しさではあると思います。

石上委員長 そこは課題ですね。

小林委員 以前、鉄道博物館と大宮盆栽美術館がシャトルで結ばれたことがありましたね。あれは、あまり利用がなかったのですか。

山田委員 そうですね。鉄道ファンと盆栽のファンは層が違うので。何かもう少し工夫が必要ですね。

小林委員 市が実施したアンケート調査では、鉄道と盆栽は広く発信すべき資源だという結果になっていますので、これらをうまく結べると良いと思いますが。

山田委員 大宮盆栽美術館を建設するとき、土呂駅を盆栽駅に直してくれと言ったことがあります。やはり駅の名前は大きいからです。浦和駅と大宮駅が代表的な駅になっていますが、そこにシンボリックなものをつくる。駅名も実名にしないとインパクトが小さいですね。そのくらいのアイデアがないと、今は難しいと思います。細かいことをコツコツとやっても効果はありません。やるのであれば、競争は激しいですから、そのくらいの覚悟で大きなアイデアを出していくべきだと思います。盆栽という視点で見ますと、世界、特に中国などは、国を挙げて大変な勢いで展開してきています。

ですが、日本は、その真似をするのではなく、日本独自のアイデアと文化性を持ったもので、世界が認められているものがあるわけですから、こうしたものを大事にして、それを更に発展させていく。それには行政と市民とが一体となって、そこに力を注いでいくということも必要だと思います。

石上委員長 いかにつなげていくかということですね。

小林委員 今、鉄道博物館と大宮盆栽美術館の話がありましたけれども、おっしゃるとおり、興味があるターゲットが違うという点はあると思います。しかし、つなげるという部分では、例えば、「音」と「光」などの不変的なテーマを設定し、プロデューサーのような芸術家を招聘して、鉄道博物館と大宮盆栽美術館で同時に音と光のイベントを開くというような展開は考えられると思います。「プロジェクトマッピング」ですとかいろいろな手法がありますので、そのような手法も活用しながら盆栽や鉄道という文化芸術をつなげる。光と音とアートに興味があつて来るけれども、そこで盆栽や鉄道についても広く触れることができる。良いものでもばらばらですと集客力が弱くなってしまうので、何か共通のコンセプトによる事業展開というの必要だと思います。

石上委員長 「プロジェクトマッピング」は、今、流行していますね。東京駅のものがよく報道されていましたが、いろいろなところで見られるとおもしろいですね。

小林委員 例えば、盆栽を使って四季をあらわすとか、今までにない魅力を伝えることのできる手法ですので、非常におもしろいと思います。

山口委員 以前にも取り上げたと思いますが、8年程前に京都で開催された合唱祭に参加しました。この合唱祭は、世界の合唱団が集まり、夏休みに1週間から10日くらいの期間で開催されたもので、ワークショップなども実施され、ここが本当に京都なのかと思うほど、多くの外国人が訪れていました。当然、訪れた外国人の方々は、大会終了後、京都のまちは見所が多くありますので、京都観光をしていったのだと思います。仮に、さいたま市でそのような企画をしたら、やはり訪れた人が驚くような仕掛けが必要となると思います。

先ほど、小林委員から二つの方向性というお話がありました。例えば、歌であれば、多くの市民参加が期待できます。また、さいたま市には、盆栽・人形・見沼田

圃などの多くの地域資源や施設など会場がたくさんありますので、この強みを生かしながら、今お話ししたような合唱祭をやることは可能だと思いますし、このような機会があれば、さいたま市を世界にアピールしていくことができるのではないのでしょうか。

海外でさいたまを説明する際には、東京の隣にあって、自然も多く残っている都市ですという説明をしています。海外での知名度はあまり高くありません。さいたまという場所をもう少しわかっていただくという意味でも、何か大きな取組をすることは必要です。そこに携わった子どもたち全員が、やり遂げたという思いを感じられるようなことも大切かと思います。

柴原委員

先ほど小林委員が、外に発信するのであれば本物感が必要であるとおっしゃっていましたが、私も本当にそのとおりだと思います。そのような方向性で実施していくということであれば、相応の予算をつけたり、一流の方に来ていただいたりということを実践し、まず、さいたま市が意気込みを示して、初めて、市民も参加しようということになってくると思います。

逆に、市民レベルという方向性になると、今行われている市民まつり、区民まつりの域を出ないような気がします。国外へ発信して文化芸術都市さいたまというものをアピールしていくのであれば、プロのアーティストなどを招聘して、海外からもそのアーティストを目的に訪れていただけるような展開が大事ではないかと思っています。

石上委員長

昨年度からバランスということが議論になっていて、どのようなバランスが適正なのか、なかなか結論が出ていないところです。やはり、国際芸術祭と銘打つのであれば、一流のものがなければ、国際とは言えないのかもしれない。

せっかくですので、ほかに具体的な事業展開のアイデアなどについて、ご意見ありますか。

井藤委員

他市のいろいろな事例がありますが、創造ということで考えますと、他市の真似をして、同じようなことをしても意味がないと思います。

前々から出ていますように、盆栽や人形、鉄道などは、歴史があるさいたまの資源だと思いますので、本物は本物という味があると思います。ですから新たに何かをつくるという発想ではなくても、これらをつなぐ、磨くという考え方もできると思います。例えば岩槻で、人形の製作現場を見たいと希望があったとしたら、どこかでイベント的に開くよりも、昔から何代もつないでいる、つくりものではない裏の作業場や工房を見学してもらう方が、魅力を伝えることができるのだらうと思います。

そのようなところで考えますと、鉄道と盆栽、人形はミスマッチという考えもあるかもしれませんが、あえてミスマッチをつなげるというところが、またおもしろいのではないかと思います。

石上委員長

もし、職人さんが仕事をされている現場を見ることができたら、それはすごいことですね。

井藤委員 今、岩槻では、駅を中心に3キロくらいの円の中に70～80軒の人形工房があります。このような地域は全国に一つしかないので、この環境を活かして、職人の皆様のご協力をいただいて、わざわざ人を工房に招き入れるのは難しいかもしれませんが、表からや窓越しに、人形の制作現場を見てもらうというようなことを、今考えています。

石上委員長 今伺って思いついたのは、新潟に行って酒蔵めぐりをする時に、本当の杜氏さんのお話を伺って、大きな酒蔵を見学した後にお酒を少しいただいたりするとすごく楽しい気分になれるということがありますね。例えば、このような本物感を体験できるようなコーディネートができると良いですね。

井藤委員 例えば、庭でも何でも、急にそれらしく見せてつくらせたものと、何百年と経ったものは、その重みと言いますか、何となくわかる、伝わると思います。ですから、そのものが持つ歴史の重みのようなものを打ち出していくべきではないかと思えます。

山田委員 私がイタリアに行って、会食をしていた時に、イタリアの方に何か日本の歌を歌ってほしいと言われ、何の歌を歌うか迷っていると、逆にイタリアの皆様が「さくら」を歌ってくれました。日本の伝統的な歌を知っているわけです。我々が忘れかけているようなメロディーを外国で聞けて、大変、感激しました。文化芸術を考える上で、このような根本的なものを大切にしていける必要があると思えます。

石上委員長 そのようなものを子どもたちに伝えていくことも大事ですね。

山田委員 そうですね。我々は、自然と伝わっていくようなものをつくっていく責任もあると思えますし、そのような環境をつくるという視点も大切だと思います。
今後の文化芸術にとって、創造性の高い人材をどのように育成していくかということが一番大切ですね。

井藤委員 少し話は違うかもしれませんが、国際芸術祭を考えていく時に、まず国内で盛り上げて、北海道や九州、沖縄から次々と人が訪れるようなイベントにしていかないと、いきなり国際的に発信していくというのは難しいと思えます。

石上委員長 「瀬戸内国際芸術祭」では、女性誌などで特集が組まれたりして、観光コンテンツとして非常にうまく展開していると思えます。今までは、このような国際芸術祭が、女性誌に取り上げられることはあまりなかったような気がします。
女性の方々に伺いたいのですが、いかがでしょうか。

柴原委員 「瀬戸内国際芸術祭」は、「ベネッセ」の力が大きいと思えます。

石上委員長 もともとの始まりはそこからですけどね。

大久保委員 女性にとって、このようなイベントに行って、何かそこならではのグッズ、お土産を買うということは、結構、楽しみの一つだったりします。男性はそうではないかもしれませんが、女性や子どもは、美術館に行っても、ミュージアムショップなどでたくさんのお金を使ったりします。

例えば絵本でも、「ピーターラビット」や「青虫くん」とか「ミッフィー」などの展覧会をデパートなどで開催しても、グッズのコーナーの方が展示コーナーよりも混んでいたりしますね。実は、入場料として払っているお金よりも、グッズにかける金額の方が多かたりするので、イベントの開催に当たっては、物販も考えていくことが重要だと思います。

石上委員長 そうですね。グッズ展開は意外と大事な要素かもしれません。

柴原委員 あと、グルメですね。

石上委員長 グルメはたくさんあるのではないですか。

柴原委員 この間、富士山が世界遺産に登録されました。たまたま駅で入手したJRのパンフレットに、「富士シフォン」という、富士山の形をかたどったシフォンケーキがあって、それがすごく売れていると聞きました。今後、さいたま市も世界遺産に申請することがあるのであれば、それに合わせて何かをつくるというのでも良いでしょうし、例えば、盆栽の形のケーキなども面白いと思います。

山田委員 さいたまは、グルメをつくるのがあまり上手くないですね。良いものを食べて、より良いものを人に食べさせてやろうという気構えがないと、うまうまいかかないですね。日本一ではなく、世界一になろうという気構えがないと良いものはできません。そういう意味では、研究、創造するという姿勢は、文化芸術にイコールだと思います。

外国人が来ると、体が大きいのに、シャツなんかLサイズまでしか売っていないから買えないという話も聞きます。世界を相手にしていくのであれば、そのようなところも総合的に研究していかないといけないと思います。

石上委員長 グッズやグルメは、研究すればまだまだ可能性がありますね。

山田委員 非常に可能性はあると思っています。日本は多様な食材が多くあり、食文化ということでは、世界に冠たる国ですよ。海の幸にしても、山の幸にしても、これらをうまく料理して出す工夫をする。京都あたりには有名な人が多くいますけれども、さいたまでもこのような人材が欲しいですね。

石上委員長 ありがとうございます。

そろそろ予定の時間ですので、一応、終了とさせていただきますと思います。最後に、全体を通してのご意見、またはご質問等がございますか。いかがでしょうか。

柴原委員 次回までで構わないのですが、日本で、三大〇〇とか〇〇百景とかありますが、そのようなものがさいたま市であれば、ぜひ知りたいと思います。

事務局 調べておきます。

石上委員長 以上で意見交換を終了します。ご協力ありがとうございました。

○その他

- ・今年度の会議日程を説明
- ・本日の会議結果は公開することとし、会議録及び会議の開催結果を事務局にて作成し、各区情報公開コーナーでの閲覧、さいたま市ホームページへ掲載を行う旨を説明。